

修士論文（要旨）

2013年1月

中年期におけるキャリア・デザインが高齢期の就業に及ぼす影響

指導 杉澤秀博 教授

老年学研究科

老年学専攻

210J6013

富樫正義

目次

ページ

I. はじめに	1
1. 定年後の転職・再就職の必要性	1
2. キャリア・デザインの必要性	1
3. 定年前のキャリア・デザインに関する研究の到達点と課題	2
4. 研究の目的	2
II. 研究方法	2
1. 調査対象	2
2. 調査方法	3
3. 分析方法	3
4. 倫理上の配慮	4
III. 結果	4
1. ストーリーライン	4
2. 仕事に対する欲求が強く、貪欲に知識・技能を求めてきた	5
3. 直面した問題に対して常に前向きに取り組み、最善を尽くしてきた	6
4. 新たな生きがいを求めている	6
5. 仕事の縁で仕事を得ている	7
IV. 考察	8
謝辞	9

参考文献

図 1

資料

I. はじめに

1. 定年後の転職・再就職の必要性

超高齢社会へと突入した日本において、高齢者の労働意欲の高さは国際的にも有名である。しかし日本の企業の82%が60歳定年制を採用しており、企業で働く雇用者の多くは60歳で定年を迎える。一方、定年退職者の退職後の就業希望形態をみると、正社員での就業を希望する者の割合が最も多いが、希望通りの就業形態での勤務は難しい状況である。そして、これから定年を向かえる50~60歳の男性も同様に、定年後に雇用者としての就業を希望する者が多くいることは容易に考えられる。しかし、全ての希望者が継続雇用されるわけではない。実際に希望者全員が65歳以上まで働ける企業の割合は48.8%となっている。つまり「転職・再就職」という新しい道を選択する必要も大いに考えられるのである。では、就業希望者が望みどおり就業するには、定年退職前にどのような準備が必要であろうか。本研究では、特に定年退職前におけるキャリア・デザインに着目してみたい。

2. キャリア・デザインの必要性

職業を通して個人の生涯にわたる人間成長を目指した自己啓発をキャリアと定義し、定年退職後も就労を希望し、かつ仕事にやりがいや生き甲斐を求める人の場合、定年前からこの実現に向けた自己啓発などのキャリア・デザインが必要と考える。

3. 研究の目的

定年退職後に再就職を実現した男性被雇用者を対象に、再就職に至るまでのプロセスを、特に定年退職前のキャリア・デザインとの関連で質的に分析する。

II. 研究方法

1. 調査対象

現役時代にホワイトカラーとして勤務していた男性で、定年退職後に再就職を果たした経験のある64歳から78歳の男性5名であった。対象者の抽出は、筆者の個人的なネットワークを通じた機縁法によって行った。

2. 調査方法

調査方法は質的調査であり、半構造化された質問紙を用いた個別面接法で実施した。質問は「どのようなプロセスで職業キャリアを積んできたか。=職業キャリアのプロセス」「50代で将来のビジョンはあったか。=中年期でのキャリア・デザインの有無」「定年退職間際に退職後のビジョンはあったか。=定年退職間際のキャリア・デザインの有無」の3点を中心とした。

3. 分析方法

修正版グランデッド・セオリー・アプローチに基づいて分析した。分析テーマは「ホワイトカラーの男性定年退職者が再就職に至るプロセスと定年退職前のキャリア・デザインの実施とその有効性」とし、分析焦点者は「ホワイトカラーとして勤務していた男性で、定年退職後に再就職を果たした者」と設定した。

III. 結果

【仕事に対する欲求が強く、貪欲に知識・技能を求めてきた】【直面した問題に対して常に

前向きに取り組み、最善を尽くしてきた】【新たな生きがいを求めている】【人・物・金に恵まれている】の4つのカテゴリーが抽出された。【仕事に対する欲求が強く、貪欲に知識・技能を求めてきた】は、[現役時代に培った技能・資格が再就職に役立っている][現役時代の仕事に関する資格を取得している。または技能を伸ばす努力を継続的に行ってきた][仕事への意欲を継続して持ち続けている]の3つの概念から、【直面した問題に対して常に前向きに取り組み、最善を尽くしてきた】は、[いかなる仕事に対しても置かれた状況下で最善を尽くしている][今の仕事に集中し定年退職後の明確なビジョンは無かった]の2つの概念から生成された。【新たな生きがいを求めている】は、[定年退職後も社会活動への参加を求めている][新たな環境で仕事をしたい]の2つの概念から、【仕事の縁で仕事を得ている】は、[現役時代の仕事の縁が再就職のきっかけとなっている]の概念から生成された。ここから【仕事に対する欲求が強く、貪欲に知識・技能を求めてきた】と【直面した問題に対して常に前向きに取り組み、最善を尽くしてきた】が再就職に直接影響しているとともに、【新たな生きがいを求めている】と【仕事の縁で仕事を得ている】を介して再就職に影響していたことが分かる。

IV. 考察

定年退職後に再就職を成功させるには【仕事に対する欲求が強く、貪欲に知識・技能を求めてきた】より、現役時代の仕事に関する資格や技能を身につけ、さらにその資格・技能を再就職に役立っていることが分かった。そして【直面した問題に対して常に前向きに取り組み、最善を尽くしてきた】より、長い職業人生で直面した苦難や困難に対して正面から向き合っていることが、再就職を達成できた精神的な支柱であることも明らかになった。他方で、対象者は中年期において定年退職後の職業について明確なキャリア・デザインをもっていなかった。つまり、本研究で着目したキャリア・デザインについては、再就職を達成した人の再就職の達成要因として大きな比重を占めていなかったことになる。では、キャリア・デザインは不要であろうか。[現役時代に仕事に関する資格を取得している。または技能を伸ばす努力を継続的に行ってきた]などの概念に見られるように、変化の激しい現在においては継続した学習が次の職業に繋がっているのである。つまり目の前の仕事に役立てることを目的とした自身のブラッシュアップを継続的に行うことが、次の新たな職業に繋がっているのである。そのためにも現在の仕事が理想的ではなくても、そこで最善を尽くして周囲に信頼されるように仕事をする必要がある。そのことが[現役時代の仕事の縁が再就職のきっかけとなっている]に繋がっている。さらに、【新たな生きがいを求めている】に見られるように、毎日の生活に刺激を求めたり、さらなる仕事の面白みを追求したい、と能動的な仕事への姿勢も再就職に重要であることが示唆された。最後に【仕事の縁で仕事を得ている】に示されたように、再就職を成功させる要因には、仕事上でのネットワークが重要であることも示唆された。

本研究の限界・課題について、対象者が限定的であり、結果の普遍化には慎重である必要がある。その他コホートによる違いについても検証する必要がある。対象者の年齢が60代前半から70代後半と幅があり、現役時代または定年退職時の経済状況が異なっている。年代別での調査を行うならば、本研究とは異なる知見が得られるかもしれない。

参考文献

- 1) 柴田博, 長田久雄, 杉澤秀博編『老年学要論 - 老いを理解する - 』建帛社、2007年.
- 2) 古谷野亘, 安藤孝敏編著『新社会老年学 - シニアライフのゆくえ - 』株式会社ワールドプランニング、2003年.
- 3) 杉澤秀博, 柴田博編著『生涯現役の危機 - 平成不況下における中高年の心理 - 』株式会社ワールドプランニング、2003年.
- 4) 川喜多喬「50代のライフデザインとキャリアデザイン - 都市「団塊世代」を中心に - 」「『Hosei University Repository』2005年.
- 5) 松本恵「高齢者の就労意欲に関わる要因 - 生活意識との関係性についての考察 - 」「『Works Review 』2006 vol.1、リクルートワークス研究所研究報告、2006年.
- 6) 大内尉義, 秋山弘子編集代表, 折茂肇編集顧問『新老年学第3版』東京大学出版会、2010年.
- 7) 前田信彦「高齢期における多様な働き方とアンペイド・ワークへの評価-男性定年退職者の分析-」『国立女性教育会館研究紀要』vol.7、2007年.
- 8) 柴田博『8割以上の老人は自立している!』ビジネス社、2002年.
- 9) 清家篤編著『生涯現役時代の雇用政策』日本評論社、2001年.
- 10) 伊東光晴, 河合隼雄, 副田義也, 鶴見俊輔, 日野原重明編集委員『老いと社会システム』岩波書店、1987年.
- 11) 川喜多喬著『人材育成とキャリアデザイン支援-人材マネジメントの基礎哲学-』労働新聞社、2009年.
- 12) 川喜多喬『人材育成論入門』法政大学出版局、2004年.
- 13) 阿部正浩, 黒澤昌子, 戸田淳仁「資格と一般教育訓練の有効性-その転職成功に与える効果」『経済産業研究所ディスカッション・ペーパー』2004年.
- 14) 佐藤厚「職業キャリアと高齢期の就労見通し - 団塊の世代を中心に - 」「『Hosei University Repository』2010年.
- 15) 高木朋代「高齢者の就業と引退 - 自己選別はなぜ始動されるのか」『日本労働研究雑誌』、2009年.
- 16) 高木朋代「高年齢者と転職: 成功者のキャリア特性分析」敬愛大学研究論集、2007年.
- 17) 戎野淑子「高齢者雇用の成立条件と雇用機会の創出」日本労働研究雑誌、2003年.
- 18) 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂、1999年.
- 19) 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂、2001年.
- 20) 木下康仁『ライブ講義 M-GTA-実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂、2007年.
- 21) 西村芳貢「サラリーマンの職業的引退に伴う心理的問題の克服のプロセス研究」桜美林大学大学院老年学専攻修士論文、2009年.